

ひなたとひかり⑩

たか すぎ りっ か
高杉六花／作 ま ふゆ
万冬しま／絵



講談社 青い鳥文庫

CONTENTS

☆もくじ☆

- | | | | | | | | | |
|-----------------------------------|----------------------------|----------------------|-----------------------------------|---------------------------|-----------------------|--------------------|-----------------------------------|-----------------------------|
| ★09 主役争奪戦、開幕！
しやくせんぐわくせん、かいまく！ | ★08 文化祭準備スタート
ぶんかさいじゅんび | ★07 衝撃の事実!?
しやうげき | ★06 ピンチ！ 前期中間テスト
ピンチ！ ぜんきちゅうかん | ★05 壱弥のシークレットコンサート
いちや | ★04 トップアイドルの輝き
かがや | ★03 約束のデート
やくそく | ★02 愛梨とエマの不思議な友情
あいり ふしぎ ゆうじよう | ★01 ドルフエス後日談
ドルフエス ごじつだん |
| 114 | 103 | 95 | 81 | 65 | 53 | 42 | 25 | 10 |



★10 悪夢再び！ とんでもないお願い — 128

★11 推しが家にいる件 — 138

★12 いよいよ文化祭！ — 150

★13 ロミオとジュリエット — 156

★14 白雪姫と王子様のサプライズ — 167

★15 私たちの秘密

大ピンチ!? 【side 光莉】 — 180

★16 王子様の警戒 【side 壱弥】 — 185

特別編 kira-kira ファンネーム決定！ — 192



おとな
幼なじみ

おもな登場人物

あひだのひなた
相沢日向

しりつ がくえんちゅうとう ぶ
• 私立ステラ学園中等部
ねんせい げいのう ビー
2年生 芸能コースBクラス

す た もの
• 好きな食べ物:
パンケーキ、マシュマロ

きら た もの
• 嫌いな食べ物:ピーマン

しゅ み ひみつ お かつ どくしょ
• 趣味:秘密の推し活、読書



ひかり ふたご いちご せいせきゆう
光莉の双子の妹。しっかりもので成績優
秀な女の子。光莉と入れ替わって何度もス
テージに立ち、歌への情熱に気づく。壱弥
とくべつしん さいいん つと
が特別審査員を務めるガールズグループ
オーディションを勝ち抜き、『kira-kira』の
メンバーとしてデビューした。

ふたご
双子の
姉妹

りょうおも
両想い

じ むしょ こうはい
事務所の後輩

しん ゆう
親友

なる せい いちや
成瀬壱弥

しりつ がくえんちゅうとう ぶ
• 私立ステラ学園中等部
ねんせい げいのう とくエー
2年生 芸能コース特Aクラス

す た もの
• 好きな食べ物:
ハンバーガー、いちご大福(秘密)

きら た もの
• 嫌いな食べ物:グリーンピース

しゅ み きつぎよく
• 趣味:ギター、ピアノ、作曲

ひかり にん き せ かいてき
光莉のクラスメイトで人気アイドル。世界的な
スーパーstar。歌もダンスも得意でさわやかな
おう じ さま しゅうたい おれさま ひなた
王子様だけど、その正体はクールで俺様。日向
の前ではデレることも。



大谷 陸

しりつ がくえんちゅうとうぶ
私立ステラ学園中等部
ねんせい げいのう 2年生 芸能コースBクラス

- 好きな食べ物: チーズバーガー、タコス
- 嫌いな食べ物: カリフォルニアロール
- 趣味: バスケ

こあくまけい ひなた ひかり ようちえんじ
小悪魔系イケメン。日向と光莉の幼稚園時代
だいの 幼なじみ。海外生活が長かったため、
にほんの アイドルには疎い。幼稚園のころから
ひなたのことがずっと好き。

相沢 光莉

しりつ がくえんちゅうとうぶ
私立ステラ学園中等部
ねんせい げいのう 2年生 芸能コース特Aクラス

- 好きな食べ物: チェリーパイ、マシュマロ
- 嫌いな食べ物: ビーマン
- 趣味: 諒くんとデート

ひなた ふたこ あね ちやうにんき ようちえん
日向の双子の姉で超人気アイドル。幼稚園の
しこと はじ しょうがく ねん
ときにキッズモデルの仕事を始め、小学5年
せい生でアイドルデビュー。おっとりさんで天然。
わるくち い き かげ どりよくか
悪口を言われても気にしない。陰の努力家
で、何事に対しても前向きな姿勢を貫く。

こうさい ちやう
交際中

白下部 諒

しりつ がくえんちゅうとうぶ
私立ステラ学園中等部
ねんせい げいのう 2年生 芸能コースBクラス

- 好きな食べ物: ピザ、ブドウ
- 嫌いな食べ物: シイタケ
- 趣味: 光莉とデート

ひかり
光莉のボーイフレンド。やさしい性格で光莉の
いちばん おも ちちおや げいのうじ むしよ
ことを一番に想っている。父親は芸能事務所の
しやちやう かつどう つつ いっぽう おんがく
社長。モデルの活動が続ける一方で、音楽プロ
デュサーを目指している。



かんざき あいり
神崎愛梨

もとてんさい こやく キラ キラ
元天才子役で、『kira-kira』のメンバー。
カメラの前では天使のような美少女だが、素は超ネガティブ。日向と同じステラ
がくえんげいのう ねんビー ざいせき
学園芸能コース2年Bクラスに在籍。



ミーナ

がくえんげいのう ねんビー
ステラ学園芸能コース3年Bクラス。ク
キラ キラ
ールでかっこいい『kira-kira』のリーダー。
とくい ひなた ねえ てき
ダンスが得意で、日向たちのお姉さんの
そんざい
存在。



あさま りえ
東エマ

モデル。ステラ学園芸能コース2年Bクラ
がくえんげいのう ねんビー
ス。光莉と諒とは、芸能事務所ギャラクシー
ひかり りょう げいのう し むしょ
時代の同期。『kira-kira』オーディションに
じ たい どう き キラ キラ
も参加したが、最終審査で落選した。



ゆめの
夢乃

さいしゅうしん さ ひなた
オーディションの最終審査で、日向といっ
しよに戦った『月』グループの仲間。アイ
たか つき なか ま
ドル研修生として、ステラ学園芸能コー
けんしゅうせい がくえんげいのう
ス2年Bクラスに在籍。



きしimoto まこと
桂木真麻

いちや しゅえん がくえん
壱弥の主演ドラマ『学園プリンス!』でヒロ
えん じょうゆう
インを演じた女優。おっとりしていてやさし
せいにかく す しゅうちやく
い性格だけど、好きなものには執着するこ
がくえんげいのう ねんビー
とも。ステラ学園芸能コース2年Bクラス。



たかざわ ゆい
高沢悠雅

いちや おな しゅえん せんぱい にんきはいゆう
壱弥と同じ事務所の先輩で人気俳優。す
せ たか おんな こくど しゅみ
らっと背が高く、女の子を口説くのが趣味。
がくえんげいのう ねんとくえー
ステラ学園芸能コース3年特Aクラス。

エストレプロダクション

しなぞく

所属タレント

なる せ いち や たかざわ ゆう が き ら き ら あい り ひ な た
成瀬 壱弥、高沢 悠雅、kira-kira(ミーナ、愛梨、日向)

マネージャー

まつ た いち や まつ だ い
松田 壱弥のマネージャー。40代。
み すず き ら き ら げん き あか だ い しんじん
美鈴 さん kira-kiraのマネージャー。元気で明るい20代の新人。

ギャラクシー

しなぞく

所属タレント

ひか り りょう
光莉、諒、ナチュリ

ナチュリ

ギャラクシー所属の6人組の新人アイドルグループ。

はなざき はる か 花崎 遥香	リーダー、ダンス担当。	あまばら ゆう か 雨払 優華	ダンス担当。
つきかげ ほたる 月影 堂	ダンスボーカル。	さくら も み し 桜 紅葉	ダンス担当。
ほしなな る り 星七 瑠梨	ダンスボーカル。	や くも こころ 八雲 心	ダンス担当。

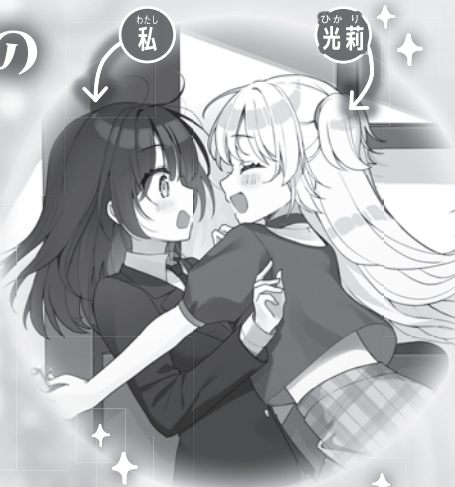
マネージャー

なつ さん ひか り
ナツ さん 光莉のマネージャー。30代。
ゆみ か
弓佳 さん ナチュリのマネージャー。

か ん
9巻までの
は な し
お話

★1

わたし なまえ ひなた ふた こ あね ひか
私の名前は日向! 双子の姉・光
り かお は そっくりだけど、せいかく ま
莉と顔はそっくりだけど、性格は真
まじく 逆なの。アイドルでキラキラしてる
ひかり 光莉とちがって、わたし はどこからみ
ふ つう し み おんな こ
も普通の、地味な女の子な
んだ。



★2

ある日、ピンチの光莉に頼まれて、
代わりに学校に行ったんだ。そこで
大好きな推しアイドルの吉弥に
会って、すごくドキドキした!

★3

そのあとなんと、また光莉と
入れ替わってステージに
立ったよ。私はシンデレラ
役で、王子役は吉弥だったの!





★ 4 ★

VRユニット「よなひな」の活動をととして、
「アイドルになる。」と決心した私。

吾々が特別審査員を務めるガールズグループオーディションにエントリーし、一次、二次、三次審査を突破したの。でも、いよいよ最終審査というときに……。

★ ★ ★ 5

週刊誌に光莉と諒くんの熱愛報道

が出てしまったの！ さらには私が光莉の双子の妹だってこともバレてしまったんだ

けど、このピンチを乗り越えて最終審査に合格。『kira-kira』としてデビュー

をはたしたんだ！



★ 6 ★

私はお仕事と学業を両立させるために、
芸能コースがあるステラ学園に転校

することに。初出演したアイドルフェ

スでは、kira-kiraとライバルのナチュリ
がいっしょにステージに立って、大成功

をおさめたの！



つづ はなし
続きはお話で！



01 ドルフエス後日談

「ただいま〜……。」

お仕事と学校とレッスンを終えて帰ってきたら、すっかり夜になっていた。

昨日のドルフェスの疲れもまだ抜けていなくて、へろへろ。
夜ご飯を食べて、ゆっくりお風呂に入って、リビングのソファに倒れこむ。

「ふ——。足パンパン……。」

ごろごろしていたら、光莉がアイスを持ってやってきた。

「日向ちゃん、今日もお疲れさま〜！ はい、いっしょに食べよう？」

「わあ！ ありがとう！」

光莉からチョコミント味のアイスを受け取って、パクツとひと口。

「ん〜。おいしい〜。」

「お風呂あがりのアイスは最高だよ〜。」



にこにこ笑顔で私の横に座った光莉も、パクツ。

「うーん！ チョコミントもおいしい！」

あれ？ 今、「チョコミントも」って言った？

そういえば……。

「光莉、さっきもアイス食べてなかったっけ？」

「ふふふ。さっきのは、クッキー&クリームだもん。」

「えつ。二個も食べたなら、お腹壊さない？」

「だいじょうぶだよ。今日はとってもいい日だったから、三個までOKにしたんだ。」

「これ、三個目!？」

うふふつて、いたずらっぽく笑う光莉は上機嫌。

お昼休みに、エマちゃんと和解できたからかな。

「そうだ！ 日向ちゃん、ドルフェスの動画見た？」

「まだ見てないんだ。どこかで見られるの？」

「もっちゃん！」

テレビをつけた光莉は、情報番組の見逃し配信を再生した。

『さて、次は、昨日行われたアイドルフェス東京です。話題のアイドルが集まり、会場が熱狂の渦に包まれました。』

わあ〜！ ドルフェスの様子が、テレビで紹介されたんだね！

アナウンサーさんが、にこやかに続ける。

『特に注目されたのは、メインステージの成瀬壱弥さんと光莉さんのパフォーマンス！

ふたりのステージは観客を魅了し、SNSでも大きな話題となっています。』

パッと画面が変わり、うつし出されたのは壱弥のステージ！

昨日はバタバタしていたから、壱弥と光莉のステージを見ることができなかったの。

少しでも見たい……！

『ドルフェス東京！ みんな、楽しんでる？』

テレビ画面にうつった壱弥の姿に、ドキン！ と胸が高鳴った。

まばゆい照明を全身に浴びて、広いステージの中央に立ってる壱弥……。

キラッキラに輝いていて、オーラがすごくて、かっこよくて美しくて麗しくて尊い。



『いっしょに楽しもう！』

『『ぎや~~~~~！』』

観客の拍手と歓声が響き、会場は一瞬で熱気に包まれた。

ヒット曲を歌う壺弥から、目が離せない。

（かかかっこいい！ 衣装もダンスも歌もお顔も、かっこいいが過ぎる〜！）

はっ！ いけない！

ここはリビングだ。となりには光莉がいる。

限界オタクの域に達するほどの壺弥ファンだって、気づかれるわけにはいかないっ！

観客といっしょに萌え散らかしそうになるのをぐっところえて、尊い壺弥のステージを

網膜に焼きつける。

『成瀬さんは、ヒット曲のほかに、自身が作詞作曲を手がけた新曲「By Your Side」を

初披露しました。その圧倒的なパフォーマンスに、会場の盛り上がりは最高潮に達しまし

た。』

わっ。新曲は、壺弥が作詞したんだ！ すごい！

テレビ画面には、新曲を歌う壱弥がうつし出された。

『♪日が昇るたびに 君を思い出す どんな小さなことでも 君との時間が輝く』
ほわ〜！ 新曲はバラードなんだね！

しかも、ギターを弾きながら歌ってる〜！

（かつこいい！ かつこいいが極まつてる……。）

壱弥のハスキーな甘い声に、胸がふるえっぱなしだよ。

スタジオのアナウンサーさんたちも、『成瀬さんはギターも弾けるんですね！』『これは
ヒットの予感です！』なんて盛り上がってる。

『♪びとりじゃ不安で 何度も振り返るけど 君がいるから 前を向けるんだ』
わあ……。曲も、歌詞も、すごくいい……。

（こんなふうに、壱弥に想われてみたいな。）

なんて、ついうつとりと聞きほれていたら。

「うふふ。日向ちゃんへの想いが、たっぷりつまった歌詞だね♡」

「へあっ!？」



光莉ひかりがとんでもないことを言い出すから、おかしな声こえが出でちゃったよ。

あからさまにドキッとしてしまったし、さすがに今のリアクションはマズい……。

「そ、そんなわけないでしょ。ファンへの想おもいがつまってるんだよ。」

とつさに否定ひていしたけれど、ぶわつと顔かおが熱あつくなっちゃった。

うわ~~~~。静しずまれ自分じぶん~~~~！

「あらあら。日向ひなたちゃんったら、お顔かおが真まっ赤か。かわい~~~~！」

「もうっ。からかわないですよ。」

むぎゅーつと抱だきついてきた光莉ひかりに抵抗ていこうして、ジタバタすると。

光莉ひかりは私のほっぺをむにむにしながら、わざとらしく眉まゆを下さげた。

「悲かなしいなあ。日向ひなたちゃんは、私のぎゅーが大好きだいすだったのに。こんなに抵抗ていこうされるなん

て、壱弥いちやのせいだ。壱弥いちやのぎゅーのほうがいいんだ。くすん。」

「ななななに言いってるの!？」

「えーん。壱弥いちやとカレカノになって、日向ひなたちゃんが変わかわっちゃったよ。」

「ななななっていないって！ カレカノになんて、なっていないよっ。」

「まだなつてないの？ あらら。壱弥いちやつたら、意外いがいとくじなしなんだから。」

ひい。くじなしって……。

トップアイドルで絶対的王子ぜったいてきおうじの壱弥いちやに、なんてこと言うの？！

そんなこと言えるの、トップアイドル同士どうしの光莉ひかりだけだよ！

「壱弥いちやが私わたしにひざまずいて、『光莉ひかりお姉様ねえさま、日向さんひなたとの交際こうさいを許ゆるしていただけないでしょうか。』って懇願こんがんしてきたら、考かんがえてあげないでもないんだけどなあ。もたもたしてるよ、日向ちゃんを取られちゃうぞ。」

もうっ。めちやくちやなことを言いってる！

（カレカノ、か……。）

私わたしと壱弥いちやは両想りやうおもいになれたんだけど、つきあつてはいない。……と思う。

いつかは壱弥いちやのカノジョになれたらいいなあつて、夢見ゆめみてるけど。

（そんな日ひ、来るのかな。全世界ぜんせかいの壱弥いちやファンに申し訳わけないし、おそれおおいよね。壱弥いちやはみんなの壱弥いちやなんだし。）

ふと、いつかのあーちゃんの言葉ことばを思おもいだした。



『壹弥に恋人ができたら一年くらい寝こんじゃうかもだけど……。』

……そうだよ。壹弥を独り占めするわけにはいかない。

（ダメダメ。いつかカノジョになりたいとか、図々しいよ。）

自分に言い聞かせていると、テレビからよく知ってる声が聞こえてきた。

『みんな〜！ 今日（きょう）は来てくれてありがとう！ 最後まで楽しんでね〜！ 一曲（きょく）目は、

ハッピー・ドリーム・パラダイス〜！』

あつ！ 光莉（ひかり）のステージだ！

『光莉（ひかり）さんのキラキラしたパフォーマンスも、会場（かいじょう）を一瞬（いつしゅん）で魅了（みりょう）していました。まさに、ファンの心（こころ）をつかんで離（はな）さない、光莉（ひかり）さんらしい魅力（みりょく）全開（ぜんかい）のステージでした。』

アナウンサーさんの言葉（ことば）に、私（わたし）は思わずうなずいた。

メインステージは、私たち（わたしたち）k i r a k i r a が出演（しゅつえん）した会場の数倍（すうばい）の大きさ。満員（まんいん）のお客（きやく）さんは、六千人（ろくせん）くらいいるんじゃないかな。

デビューしてわかった。

この広さ（ひろ）の会場（かいじょう）で、この人数（にんずう）を楽し（たの）ませるのはすごく大変（たいへん）なこと。

壹弥と光莉のチケットは今年も入手困難だったって聞くし、本当にすごいよ。

やっぱりふたりは、人気絶頂のトップアイドルなんだなって、あらためて思った。

「光莉はすごいよ……。お客さんの目が、とってもキラキラしてる。」

「ふふふ。日向ちゃんだって、ホラ。」

「え？」

光莉の視線を追ってテレビを見ると……。

『私たちのデビュー曲を聞いてください。『キラキラ』！』

『いくよー！』

わわわわっ！ kira-kiraのステージもうつつた〜！

『大人気オーディション番組から誕生したガールズグループ「kira-kira」が、

出演オーディションを勝ち抜き、ドルフェスに初登場しました！』

テレビ画面にうつるミリーナと愛梨と私は、すごく楽しそうに歌っておどってる。

観客席のみんなも、目をキラキラ輝かせて、盛り上がってくれてる！

（よかった〜！）



最後の曲を歌うk i r aとナチュリが、チラッとうつった。

『k i r a k i r aは、事務所の先輩である成瀬壱弥さんのヒット曲、「Until We Meet Again」を披露し、ナチュリは同じく事務所の先輩である光莉さんのデビュー曲、「恋のラズベリーパイ」で会場を盛り上げました。』

わあ……。私たちも、ナチュリも、観客席のみんなも、とっても楽しそう！

私ね、壱弥の曲の中で『Until We Meet Again』が特に好きなんだ。

ドルフェスで披露させてもらえてうれしかったし、すごく楽しかった。

とっても難しいダンスなんだけど、しっかりおどれたんだよ。

（壱弥の特別レッスンのおかげだよ。久しぶりに壱弥に会えて、パワー満タンになったから、もつともつと練習がんばれたんだ。）

……って、いけない。思い出したら、また顔が赤くなっちゃいそう。

クッションに顔を押しつけていると、光莉の声が聞こえた。

「ナチュリのみんなが、私のデビュー曲を披露してくれてうれしかったなあ。感激して、ナツさんといっしょにうるうるしちゃった。」

「光莉、会場で見てくれたの？」

「うん！ 会場の二階にね、関係者しか入れない特別室があつて、そこで見てたんだよ。」

あ、壱弥も、マネージャーさんといっしょだったよ。」

「えっ!? 壱弥も見てくれたの!?」

「うん。壱弥もすごく楽しそうに見てたよ。日向ちゃんが最後の高音を決めたときは、一瞬ドヤ顔してたんだよ。」

「……っ。そ、そんなことないでしょ。」

もう。光莉ったら、壱弥がドヤ顔をしたなんて、話を盛りすぎだよ。

（真に受けちゃダメなのに、顔がにやけちゃう。）

必死に顔を整えて、テレビに集中する。

アナウンサーさんが、興奮した様子で続けた。

『k i r a - k i r a は、ドルフェス出場をかけて戦ったライバルのナチュリと合同で出演しました。アイドル同士の熱い友情を感じるパフォーマンスが、注目を集めています!』





そうなの！

「k i r a - k i r a とナチュリの合同ステージが、今、話題になってるんだって。私たちの決断は、結果的に大成功だったんだ！」

「合同ステージにしたことで、二つのグループのファンが来てくれて、ファン層が広がったし、想定していた動員より、はるかに多い観客が来てくれたみたい。」

「ナチュリのファンクラブ会員が増えたりって、事務所みんながよろこんでるよ。」

「ギャラクシーさんに迷惑からなくてよかった。ナチュリのみんなは？」

「もちろん、ナチュリもよろこんでるし、社長にたつぷりほめてもらってたよ。」

「よかったー！」

「ナチュリのみんなの笑顔を思い出すと、自分のことにうれしくなるんだ。」

「日向ちゃん。」

「うん？」

「いつもと感じがちがう声を、不思議に思いながら光莉を見ると。」

「k i r a - k i r a さんのおかげだよ。ありがとう、ナチュリを救ってくれて。」



「……っ。」

につこりほほ笑む光莉は、いつもの『ド天然なお姉ちゃん』の顔じゃない。

後輩たちを想う『ギャラクシーのトップアイドル』の貫禄に、ドキッとしちやった。

「どういたしまして。kira-kiraは、ナチュリが大好きで尊敬してるから……。」
うれしくて、くすぐつたい。

やっぱり光莉はすごいなっと思つた。

私たちkira-kiraも、所属している芸能事務所『エストレラプロダクション』の社長にほめてもらつたんだよ。

しかもね、ご褒美をもらえたんだ。

なんと！ 夏休みに、沖縄でミュージックビデオの撮影をするの！

もちろん、お仕事だから浮かれてはいけない。

撮影までに、新曲の歌詞と振り付けを、しっかり覚えて完璧にしなくちゃ。

プレッシャーもあるけど、ミーナと愛梨といっしょに沖縄に行けるなんて、とっても楽しい！

しみ！

夏休み^{なつやす}の^{まえ}前に、^{ぜん}前期^{きゅうかん}中間テストと、^{ぶん}文化祭^{かさい}と、^{たい}体育祭^{いくさい}がある。

どれも、^{とく}特Aクラス^{エー}に行く^いために^{ひつ}必要な『ステラ』^{ぎょうじ}がもらえる行事^じなんだ。

（^{なつやす}しっかりがんばって、夏休み^{たの}を楽しもう！）

^{つか}疲れ^{からだ}きつた^{げん}体に、元氣^きがわいてきた。





02

愛梨とエマの不思議な友情

ドルフェスから数日^{すうじつ}がたち、私^{わたし}が在籍^{ざいせき}しているステラ学園^{がくえん}芸能^{げいのう}コース二年^{ねん}Bクラスでは、ちよつとした変化^{へんか}が起^おこっていた。

「男子^{だんし}は三次元^{さんじげん}より、断然^{だんぜん}二次元^{にじげん}ですよ！ 二次元^{にじげん}の彼^{かれ}は裏切^{うらぎ}らないですからねっ！」

「なんなの、急に^{きゅうに}。三次元^{さんじげん}って……現実^{げんじつ}の男子^{だんし}に裏切^{うらぎ}られたことでもあるの？」

「いえ。三次元^{さんじげん}の男子^{だんし}とは、仕事^{しごと}以外^{いがい}で話^{はな}したことはほとんどありませんが。」

「なにそれ。わけわかんない。」

「ということで、この新作^{しんさく}乙女ゲーム^{おとめ}、オススメですよ！ ステキな二次元^{にじげん}の彼^{かれ}に出会^{であ}えるんです。」

「やめてよ。私^{わたし}を二次元^{にじげん}の沼^{ぬま}に引きずりこもうとしないで。」

今朝^{けさ}も、窓際^{まじぎわ}のエマちゃんの席^{せき}で、愛梨^{あいり}が熱心^{ねっしん}に語^{かた}っている。

エマちゃんはいつもおりの塩対応^{しおたいおう}なんだけど、今までとはちよつと雰囲気^{ふんいき}がちがう。

「なーんか、あのふたり、楽しそうだよね。」

「本当だね。」

夢乃と顔を見合わせて、ふふつと笑う。

最近、愛梨とエマちゃんはいっしょにすることが多いんだ。

「昨日リリースされた、『美男子幕末〜デイスティニーラブ〜』っていう乙女ゲームなん

ですけど、イラストが美麗で、スチルもCVもキャラデザも音楽も最高なんですよ。」

「スチルとかCVとかキャラデザとか、そっち界限の専門用語やめてくれる？ ぜんぜん

わかんないから。ていうか、そもそも乙女ゲームってなによ。」

「ふふふ。興味津々ですね。乙女ゲームというのは、女の子向けの恋愛シミュレーション

ゲームですよ。ゲーム内で、イケメンキャラたちと恋愛をして、ストーリーを進めていく

んです。キャラクターごとにストーリーがあつて、どの彼と恋に落ちるか、いろんな選択

肢があるのです！」

「へー……。まったく興味ないんだけど。」

「で、ゲームの中で選んだセリフや行動で、キャラの反応が変わったり、エンディングが



変わったりするんです！ バトルやガチャでアイテムを手に入れたり、カードを集めて育成したり、とにかくいろんな要素があつて、飽きないんですよ。」

「へー……。」

「『美男子幕末』のキャラは、実在する幕末の人物で十八人もいるんですけど、私の推しは沖田総司くん！ ビジュもお声も最高なんですよ！ で、沖田総司役の声優さんは新人なんですけど超超声がよくて！ 耳が幸せになるんですよおお！ あざとかわいくて意地悪な感じっ！」

「……いいかげん早口オタクトークやめてくれない？ ていうか興味ないの察してくれない？」

愛梨とエマちゃんは、ぎゃーぎゃー言いながらも、楽しそう。

友情が芽生えてるっぽいふたりを、私と夢乃はほほ笑ましくながめているんだ。

「エマ、ちよつと変わったよね。」

夢乃の
ゆめの
夢乃がしみじみとつぶやいた。

「前まではさ、信じられるのは自分だけって感じで、話しかけても全否定だったし、相手

を責める言い方ばかりしてたけど。愛梨にはちよつと心を許したっていうか……。」

「うん。そんな感じがするよ。」

「ドルフェスでkira-kiraのステージを見て、なんか思うことがあったのかもね。」

「そうだといいな。」

エマちゃんは今までたくさん努力してきたけれど、報われなかったみたい。

いつしか、同期のキッズモデルだった光莉をねたむようになっていた。

「光莉は努力もせずに、コネでアイドルになってズルい。」って思いこんで、自分で傷や敵を作ってしまったんだ。

でもね、挑戦しなければ傷つかないのに、エマちゃんはずつとあきらめずにがんばってる。オーディションに落ちても、モデル仲間にひどいことを言われても、戦うことをやめない。

だけど私は、芸能界に飛びこむ前まで『自分にはなにもない。』って思いこんでいた。『光莉はキラキラ輝く芸能人、私は地味な一般人。』って決めつけて、挑戦する前からあ



きらめていた。

光莉^{ひかり}と比^{くら}べられて、傷^{きず}つくのが怖^{こわ}かったんだと思う^{おも}う。

だから、傷^{きず}つくことを恐^{おそ}れずに、何^{なん}度^どだってチャレンジしつづけているエマちゃんを、私^{わたし}はかつこいいって思^{おも}ったんだ。

ドルフェスのステージで、私^{わたし}たちk i r a - k i r a は、ライバル関係^{かんけい}の新人^{しんじん}アイドルグループ『ナチュリ』と合^{ごう}同^{どう}でス^ステ^テー^ージ^ジに立^たつことを選^{えら}んだ。

大^{だい}好^すきなナチュリと、足^{あし}を引^ひつ張^ばり合^あうのではなく、お互^{たが}い敬^{けい}意^いを持^もって、切^{せつ}磋^さ琢^{たく}磨^まできるライバルになりたいって思^{おも}ったから。

k i r a - k i r a は、心^{こゝろ}からキラキラ輝^{かがや}いているアイドルを目^め指^さしてる。

そんな私^{わたし}たちのス^ステ^テー^ージ^ジを、エマちゃんに見^みてもらいたくてチケッ^{ちけ}ト^とを渡^{わた}したの。

エマちゃんは、なにかを感^{かん}じてくれたみたい。

そして、ドルフェスの翌^{よく}日^{じつ}、こっそりB^{ビー}ク^クラ^ラス専^{せん}用^{よう}の食^{しょく}堂^{どう}にや^やつてきた光^{ひかり}莉^りが、エマ

ちゃんに言^いったんだ。

『ずっといっしょにがんばってきた、大^{たい}切^{せつ}な同^{どう}期^き。』って。

そうしたら……。

『今までごめん。ずっとずっと、光莉ひかりがうらやましかった。』

エマちゃんは泣なきながら、素直すなおな気持きもちちを光莉ひかりに伝つたえた。

ふたりは、切磋琢磨せつさたくまできるライバル関係かんけいに戻もどれたみたいなの！

ずっとふたりを見守みまもってきた諒りょうくんが、ボロボロ泣ないていて……。

私わたしまで胸むねがいっぱいになって、もらい泣なきしちゃった。

『がんばる方向ほうこうと戦たたかう相手あいてを間違まちがえないようにする。』

あのときの、エマちゃんの言葉ことばを、私わたしはしっかりと自分じぶんの胸むねに刻きざんだ。

（戦たたかう相手あいては、いつだって『自分じぶん』ってこと、忘わすれないようにしよう。）

わーわー言いってるふたりをながめていたら、夢乃ゆめのが「うーん。」とうなった。

「愛梨あいりも変わかったよね。ネガティブモードに入はいることが少すくなくなった気きがする。」

「たしかに！」

愛梨あいりの中で、なにか変化へんかがあったのかな。

わからないけれど、確実かくじつになにかがかわってる気きがする。



それにね、前に、エマちゃんがいっしょに撮影さつえいしていたモデルさんたちにひどいことを言いわれていたとき、愛梨あいりがものすごく怒おこったんだ。

あんなに感情かんじょうをむき出しにした愛梨あいりは、初めて見みた。

「愛梨あいりとエマにはさ、『今まで周まわりに否定ひていされつづけたせいで、自分じぶんを否定ひていするようになつた』つていう共通点きょうつうてんがあるからじゃない？」

「そうかもしれないね。」

いつも驚おどろかされる夢乃ゆめのの分析ぶんせきに、私わたしは感心かんしんしながらうなずいた。
愛梨あいりとエマちゃんは、心こころを開ひらける仲なかになつたのかもしれない。

（よかった……。）

そのとき、よろよろしながら陸りくが登校とうこうしてきた。

「日向ひなた、夢乃ゆめのちゃん、おはよう。」

「おはよう、陸りく。」

「おはよう。あれ？ 陸くん、ちよつとお疲れ？」

「うん。昨日きのう、遅おそくまで仕事しごとしてて。ふあああ。ねむ……。先生せんせい来たら起おこして？」

「わかった！ まかせておいて。」

パチンとウインクした夢乃に、陸は「ありがとう……。」ってつぶやいて。

大きな目をしよぼしよぼさせながら自分の席に座って机につつぶすと、すぐに寝息を立てはじめた。

いつも元気な陸が、こんなに疲れてるなんてめずらしいな。

（お仕事、がんばってるんだね……。）

いまだに、陸がなんのお仕事をしているのか、ナゾなんだけど。
寝ている陸の背中に、「お疲れさま。」ってつぶやく。

すると……。

「ねえ。俺のこと、もつとほめてくれてもいいんだよ？」

うわわっ。陸ったら、寝てるの？ 起きてるの？

突然、陸から聞こえてきた声に、ぎよつとして様子を見る。

陸は机につつぶしたまま、すうすう寝てた。

どうやら寝言だったみたい。



「はつつつ！ 今、沖田くんの声が聞こえたつ！」

今度は、窓際から、愛梨の絶叫が聞こえてきた。

「幻聴？ やばっ。ちよつと、このオタク回収して。」

ドン引きしたエマちゃんが、私と夢乃に声をかける。

私たちは、くすくす笑いながら愛梨を迎えに行つた。

「はいはい。愛梨、行きますよ。もう先生が来るからね。自分の席で妄想しようね。」

「夢乃、本当なんです！ さつき、沖田くんの声が聞こえたんですううう。エマも聞

こえましたよね？」

「聞こえないから。」

「えええ……。そんなあ……。」

「しょうがないよ。エマは二次元に興味ないんだから。むしろ二次元の沼にハマってくれ

たほうが、私のライバルがひとり減るんだけど。」

「どういう意味よ？」

夢乃の言葉に、エマちゃんがいぶかしげな顔をする。

「だって、エマも壱弥いちやラブなんでしょ？」

「ああ、そういえば、オーディションのときにウワサになってましたね。成瀬壱弥なるせいちやのガチファンだから、モデル事務所じむしょをやめてオーディションに参加さんかしたって。」

たしかに、そんなウワサがあったかも。

夢乃ゆめのと愛梨あいりの言葉ことばに、エマちゃんは「はあ……。」とめんどくさそうにため息いきをついた。

「そんなのうそよ。誰だれかが私の足あしを引ひつ張ばるために流ながしたうそ。私わたしはずつと……。」

うん？ 私わたしはずつと？

エマちゃんは、そこで口くちをつぐんじやった。

「みんなおはよう。」

すぐに諒くんがやってきて、エマちゃんがふいつと視線しせんをはずす。

「おはよう、諒くん。」「おつはよう！」「おはようございます、日下部くん。」

私わたしと夢乃ゆめのと愛梨あいりがあいさつをする横よこで、エマちゃんはムシしてる。あらら……。

塩対応しおたいおうに負けず、諒くんがエマちゃんに笑顔えがおを向むけた。

「エマ、おはよう。」



「……おはよ。朝あさつぱらからうつとうしいわよ。」

「えええ……。そんなこと言いわないでよ。あ、そうだ。今月号こんげつごうの『ストロベリー☆ピ
チ』見みたよ。夏服特集なつふくとくしゅう、エマがメインだったね。よかったよ。」

「ほんと!? ……ありがとう。見てくれたんだ……。」

あ、あれ……?

かつてないほどエマちゃんが乙女おとめになつてる気がする……。

「今月号こんげつごうには光莉ひかりも載のつてるからさ。えへへ。」

「……。あつそ。ていうか、諒りょうが超脇役ちやうわきやくで出でたドラマ、いまいちだったんだけど！
もつと爪痕残つめあとしなさいよ。仕事しごとなくなるわよ！ なんかのMVエムアイにちらつと出でてたけど、そ
れもビミョーだったし！」

あれ？ エマちゃんが、急にきゅうにぷりぷり怒おこり出だした。

「えー。なんかさー、エマは俺おれにだけ冷つめたくない？ いつも俺おれだけ塩対しおたい応おうなのなんで？

さすがに傷きずつくんだけど。」

「そんなの知しらないわよ。」

「うう〜。光莉とは仲直りしたのにさ……。俺とも仲良くしてよ。」

諒くんは、ぐんと眉を下げて、うなだれながら自分の席のほうに行っちゃった。

あれ？ エマちゃんの顔は見えないけど、耳が赤くなってるような……？

（ええつと……。これは……。）

ふたりの様子を、ちよつと離れて見ていた夢乃と愛梨が、そろって首をかしげる。

「ていうか、エマって諒くんの仕事を細かく把握してない？」

「ですね。日下部くんファンかってくらい。」

「うんうん。」

私たちは、顔を見合わせてばかり。

少しの沈黙のあと、勘のいい夢乃が、ぐわつと目を見開いた。

「エマの好きな人って、もしかして……。」

「はっ！」

こういうことに疎い私でも、気づいちゃったかも！

「エマちゃんって、諒くんのが好きなのかな。」



「絶対ぜったいそうでしょ。てか、エマが光莉ひかりにかみついていたのって、諒りょうくんのがずっと好きすだった……っていうのも少しすこはあるのかも？」

「あ——。なるほどですね。」

私たちは深くうなずいて、今までのエマちゃんの言動げんどうを振り返かえってみた。

『へー。諒りょうだけBクラス落ちしたんだ。笑わらえる。』

（夢乃ゆめの訳）諒りょうだけBクラスになったんだ。同じクラスになれてうれしい……。

『どうせ、社長しゃちょうからいい感じかんじの仕事しごとをたくさんもらって、さつさとステラためて特Aとくエーに戻るもどんでしょ。』

（夢乃ゆめの訳）どうせ、さつさとステラためて特Aとくエーに戻もどっちゃうんでしょ。……さみしいよ。

『そんなの信しんじられるわけじゃないじゃない。そりゃあカノジョのことは擁護ようごするよね。好きすな子こだけひいきするとか、ほんと最低さいてい。社長しゃちょうの息子むすこなのにそんなんでいいの？』

(夢乃訳) 好きな子だけひいきして、切ないよ。私だって、ずっと好きなのに……。

「……っていう心境だったんじゃない？」

夢乃の訳はあくまでも想像だけど、あながちハズレでもない気がする。

そういえば、エマちゃんがドルフェスに来てくれた理由も、『内面も磨かないといけな
いって、諒に怒られたから。』って言ってた。

「あー……。」

「それはそれは。ご愁傷様です。」

なんだか切なくて、心がひりひりしちゃうよ。

愛梨と夢乃も、複雑な顔をしてる。

「好きな人が、別の女子を『かわいい。』ってベタぼめしてデレデレしてたら、そりやあ
イラッとするし傷つくわ。私だって、忤弥がもし誰かにデレデレしてるのを見ちゃった
ら、この世の終わり……ってくらいがつつり落ちこんで、荒れまくっちゃういそうだもん。」

「あはは……。」



夢乃から突然出てきた『壹弥』の名前にドキッとして、気まずくて苦笑いしてしまう。
「光莉の憎さが二倍になっちゃうの、わかるわ。恋が絡むとね。どうしてもね。」
「だから二次元の彼が一番なんですよ。沖田くんは私にだけデレデレしてくれますもん。」
「あはは……。」

三人でこそ話していたら、諒くんが私たちの視線に気づいたみたい。

「えっ。なにに？ 俺、なんかした？」

そこに、すかさずエマちゃんから声が飛んできてる。

「してないわよ！ その三人、ニヤニヤするのやめなさいよ！ 解散よ、解散っ！」

「はい。」

あわてて自分たちの席に散ると、陸がむつくりと起き上がって目をこする。

「ふわああ。もう先生来ちゃったの？」

「まだ来てないよ。」

「よかつたり。ていうか、な〜んか、おもしろそうな話してたじゃん。俺もまぜてよう。」

「まざんなくていいから！ ゆるふわ小悪魔は寝てなさい！」

顔を真つ赤にしたエマちゃんが、陸にも容赦ないツツコミを浴びせる。

夢乃と愛梨がニコニコ……というか、ニヤニヤして。

諒くんは首をひねっているし、陸は寝ぼけてふにやふにや言ってる。

最近の学校は、こんな感じ。

夢乃と愛梨と私、それに諒ちゃんと陸。

いつもわいわいしてるこのメンバーに、エマちゃんが入ったり入らなかったり。

エマちゃんとの距離が近くなつて、すごく楽しいし、うれしいんだ。

（今日もいい日になりそう。）

窓の外に広がる青空をながめて、うーんと背伸びをしていたら。

ピロリン！

私のスマホが鳴った。

（これは、特別なメッセージが届いたときの着信音！）

ずっとずっと待ちわびていたから、もしかしたら幻聴かもしれないけど……。

おそろおそろのスマホを見ると……。



幻聴^{げんちょう}じゃなかった！ 壱弥^{いちや}からのメッセージだ！

【明後日^{あさって}、ちよつと時間^{じかん}できた。急^{きゆう}だけで会^あえる？】

わわっ。わわわわっ。

明後日^{あさって}は土曜日^{どようび}なのに、私^{わたし}、めずらしくお仕事^{しごと}が休み^{やす}なの！

【会^あえるよ！】

すぐ^{へんじ}に返事^{へんじ}をして、ぎゅつとスマホを握^{にぎ}りしめた。

秒^{びよう}で返事^{へんじ}をしちやうなんて、気恥^{きは}ずかしいけど……。

【じゃ、デートな。楽^{たの}しみにしてる】

壱弥^{いちや}からもすぐに返事^{へんじ}が来^きて、恥^はずかしきなんて吹^ふき飛^とんじやった。

『ドルフェスが終^おわったら、時間^{じかん}作るから。』

そう言^いっていた壱弥^{いちや}。

（本^{ほん}当^{とう}に時間^{じかん}を作^{つく}ってくれたんだ……！）

うれしすぎて、頬^ほがゆるんじやう。

水族館^{すいぞくかん}デート以来^{いらい}のデート、楽^{たの}しみすぎるよ！



03

約束のデート

待ちに待った土曜日。

変装した私は、高級マンションの40階にある、壱弥のスタジオの前でほっと息をついた。

腕時計の針は、11時30分を指している。

（よかった。パパラッチに気づかれずに、約束の時間に到着できた。）
トップアイドル壱弥と、新人アイドルの私。

密会がバレたら、大スキャンダルになってしまう。

ドキドキひやひやしたけれど、ここまで来ればだいじょうぶ。

この高級マンションはセキュリティが厳しいうえに、40階は壱弥の自宅と、壱弥が趣味で作ったスタジオしかないんだって。

パパラッチや記者がここまで来ることはできないみたい。

とはいえ、壹弥いちやのマネージャーの松田まつださんや、壹弥いちやのお兄にいさんの零れいさんにバッタリ会あつたら大変たいへんだから、念ねんのため男おとこの子の変装へんそうをしてきた。

黒髪くろかみのウィッグと、メガネに学がくラン。

光莉ひかりから借りた『ヒカル』の姿すがただから、万まんが一いち、誰だれかに会あってしまっても、私わたしだってバレないはず。

「どうしよう。緊張きんちようしてきちゃった。」

玄関げんかんの前に立たつと、痛いたいくらいに胸むねが高鳴たかなった。

さつきまでのドキドキとは、ちよつとちがう。

（久ひさしぶりに、壹弥いちやに会あえるんだ。ランチャイムだけでもいっしょにいられる。）
うれしすぎて、変へんに緊張きんちようしちゃうよ。

「ふ——。落ち着おちつつこう。」

私は深呼吸しんこきゅうして、インターホンを鳴ならした。

すぐに、ガチャリと音おとがして、ドアが開ひらく。

「入はいって。」

「う、うん。お邪魔します。」

足を踏み出すとすぐに、壱弥がすばやく私の腕を引いて、玄関の中に入れた。ドアが閉まると、壱弥がふつとほほ笑む。

「いらつしやい。」

「……っ。」

わ……。壱弥だ……。

（ふわあ。今日もかつこよくてありがとうございます……。）

あれれ？ 壱弥、こんなに背が高かったっけ？

もともと、お顔が小さくて、首も手足も長くて、モデル体形だけど、ぐんと背が伸びて、さらにかつこよきに磨きがかかったような……。

しかも、ラフなルームウェア姿がかつこかわいくて、さっそく息の根が止まりそう。

（とんでもなくメロいよ。めろめろになつて横転しそうだよっ！）

ステラ学園の制服も、お仕事用の王子様衣装も、とびきりかつこいいけれど。

プライベート感たつぷりの壱弥は、私だけが見ることができる特別な姿……だよな？



（世界中の壹弥担のみなさん、私だけ堪能してしまつてごめんなさい！）
ふと、あーちゃんや夢乃を思い出して、罪悪感でちくつと胸が痛んだ。
（アイドル壹弥はみんなのもの。独り占めなんてしちゃいけないよね。）

わかつてる。わかつてるのに……。

壹弥を好きになるほど、心の中にわき上がる独占欲を、抑えられなくなっていく。

（ダメダメ。私だけ特別……なんて思つちやダメ！ 私たちは、つきあつてゐるわけじゃないんだし……。）

自分に言い聞かせていると、壹弥が私の顔をのぞきこんだ。

「どうした？」

「あつ、ごめん。壹弥がかつこよすぎて……。」

うわつ。私のバカ！

（うっかり本音が出ちゃった！）

恥ずかしくて、かああつと顔が熱くなる。

「あわわ。ち、ちがうの！ いや、ちがわないんだけど、あの、そのつ。」

ううつ。ごまかしたいのに、ジタバタしちゃって逆効果だよ。

……つて、あれれ？ 壱弥も顔が赤い？

「あー……もう。かわいすぎるんだつて。」

「へっ!？」

「変装しててもかわいいけど、いつもの日向にも会わせてもらえる？」

「あつ。」

そうだった。私、『ヒカル』の姿だった。

「日向の部屋、そのままにしてあるから。」

「わかった。着替えてくるね。」

急いで靴を脱ぎ、真っ赤な顔をカバンで隠しながら、私はバビュンと部屋に向かった。

「わ……。懐かしいな。」

壱弥が言ったとおり、付き人をしていたときに使わせてもらっていた私の部屋は、そのままになっていた。



ステキなカーテンと大きなベッド、広い勉強机、かわいいソファア。

どれもセンスがよくて、居心地がよかったな。

（これ、ぜんぶ壱弥が用意してくれたんだよね……。）

ふかふかのじゅうたんも家具も、ほこりつぽくない。

（千代さんがお掃除してくれてるのかも。）

壱弥の自宅にいる家政婦の千代さんは、寮母さんとして、私のお世話もしてくれていた。

低い位置で白髪をお団子に結っていて、着物が似合う、品のいいおばあちゃんなんだ。

千代さんのおかげで、スタジオ内のどの部屋も、いつもピカピカだった。

そういえば……。

オーディションの最終審査の直前、ちよつと変装した千代さんが、壱弥からの手紙をこつそり届けてくれたんだ。

『最終審査、テレビの前で応援してますよ。オーディションが終わったら、またスタジオにいらつしやい。日向さんの部屋は、そのままになってます。また、ぼつちやんとご飯を

食^たべてあげてくださいいな。』

千代^{ちよ}さんのその言葉^{ことば}がうれしくて、すごく心強^{こころづよ}かったの。

（お礼^{れい}、まだ言^いえてない……。）

前回^{ぜんかい}このスタジオにお邪魔^{じやま}したのは、ホワイトデー^ひの日。

そのときは千代^{ちよ}さんに会^あえなかったけど、今日^{きょう}は会^あえたらいいな。

（よし、着替^{きが}えちやおう！）

持^もつてきた服^{ふく}に着替^{きが}えて、髪^{かみ}を整^{とと}える。

ピカピカの鏡^{かがみ}がついたドレッサー^{まえ}の前に立^たって、最終^{さいしゅう}チェック。

（デートコーデ、がんばったんだけど……。どうかな。）

最近^{さいきん}は、リボン^{むなもと}がお気^きに入り^いなんだ。

胸元^{むなもと}に大き^{おお}なリボン^{おほ}がついたワンピースと、結^{むす}んだ髪^{かみ}にも細^{ほそ}いリボン^{ほそ}を着^つけたよ。

（ほんの少^{すこ}しでも、壱^{いち}弥^やに「かわいい。」^{おも}って思^{おも}ってもらえたらいいな。）

ドキドキしながら部^へ屋^やを出^でると……。

「いらつしやい、日向^{ひなた}さん。」



「千代さん！」

リビングにいたのは壱弥だけじゃなかった。

やさしくほほ笑む千代さんの姿に、ぐっと胸が熱くなる。

（千代さんに会えた！）

うれしくて、思わず駆け寄っちゃった。

「お会いできてうれしいです！ 最終審査のとき、本当にありがとうございました。」

「日向さんの奮闘、すばらしかったですよ。k i r a - k i r a デビュー、おめでと〜う〜

ざいます。すっかりファンになりましたねえ……。ふふふ。見てください、これ。」

「えっ！」

千代さんが差し出したのは、k i r a - k i r a のトレカ！

「それ、ファンクラブ限定グッズ！」

ファンクラブに入会してくれた会員さんしか買えないものだよ！？

もしかして……。

「千代さん、k i r a - k i r a のファンクラブに入会してくれたんですか？」

「ええ、ええ。入会にゅうかいしましたよ。インターネットはよくわからないので、ぼっちゃんに手て続きつづしてもらいましてねえ。」

「ええ！ 壱弥いちやに!?」

事務所じむしょの後輩こうはいのファンクラブ入会にゅうかい手続きを、トップアイドルが手伝てつだったなんてー！
(ひい。おそれおいよ——！)

あわあわしていたら、千代ちよさんがソファすわーに座すわっている壱弥いちやをチラツと見みる。

「ぼっちゃんも、トレカを爆買ばくがいして……。」

「あつ、千代ちよ！ 余計よけいなことを言いうな！」

ええつ。今いま、なんて言いったのー!? 爆買ばくがい？

壱弥いちやもファンクラブに入会にゅうかいしたってこと!?

(というか千代ちよさん、なんでそんな言葉ことば知しってるの!?)

情報量じょうほうりょうが多おほすぎるし、いろいろと衝撃しょうげきすぎて、大混乱だいこんらん！

めずらしく、壱弥いちやが真まっ赤かな顔かおであわててる。

「昼ひるだ！ 腹減はらへった！ 千代ちよ、ランチの準備じゅんびはできてるんだろ？」



「そうでした、そうでした。ちょうどお昼ひるですね。ランチにしましょう。さあ、ダイニングへ。」

ふふふ……と楽しそうに笑う千代さんといっしょに、ダイニングに向かう。

「旬の食材しゅんしきを使ったお料理りょうりを用意よういしましたよ。」

ダイニングテーブルの椅子いすに座るとすぐに、色とりどりのお料理りょうりが運ばれてきた。

千代さんの手作りランチは三品みしな。

「春野菜はるやさいのミネストローネ、ほうれん草そうとベーコンのキッシュ、春キャベツとベーコンのクリームパスタです。さあ、召し上げられ。」

「わあ、きれい……。ありがとうございます、千代さん。いただきます。」

「いただきます。」

壺弥いちやといっしょに手を合わせて、さつそくひと口くち。

「おいしい……!」

「ああ、おいしいな。」

ミネストローネのニンジンも、キッシュのほうれん草そうも、パスタの春キャベツはるも、やわ

らくて甘みがあつてとってもおいしいよ！

笑顔で食べてる私たちを、千代さんがやさしい眼差しで見つめてる。

千代さんがうれしそうなのは、「ぼっちゃんとまたいつしよにご飯を食べてあげてください。」っていう約束を果たすことができたからかな。

（私も、千代さんのお料理をまた壺弥と食えることができて、とってもうれしいよ。）
壺弥との時間が、ますます幸せに感じられた。





04

トップアイドルの輝き

食事しょくじが終わると、千代ちよさんは手作りのデザートをリビングのテーブルに置いて、壱弥いちやの自宅じたくへと戻もどっていった。

「わあ……。デザートもきれいだね。おいしそう！」

フルーツタルトと、ミントティーに、笑顔えがおがこぼれる。

オレンジやグレープフルーツが、キラキラと光ひかりに反射はんしゃして、まるで宝石ほうせきみたい。

……。なんだけど。

壱弥いちやと向むかい合あわせずに座すわった、ランチのときは様子ようすがちがう。

(千代ちよさんったら、私わたしたちが横並よこならびに座すわるようにお皿さらを並ならべてるー！)

しかも、広々ひろびろとした大きなソファおほーなのに、スイーツとティーセットがぎゅうぎゅうに

くっつけて置おかれてるよ。

まごまごしていると、壱弥いちやがサッとソファおほーに座すわった。

「日向、ここおいで。食べよう。」

「……っ。う、うん。」

（はわわ……。壺弥の『おいで。』をいただいちやつた！）

ドキドキしすぎてうるさい心臓の音が、壺弥にまで聞こえてしまいそうだよ。
自分のとなりをポンポンと軽くたたいて待つてる壺弥の横に、おずおずと座った。

「千代のフルーツタルト、うまいんだよな。」

甘いものが大好きな壺弥が、うれしそうにタルトに手を伸ばした。
肩が触れて、ドキッと鼓動が跳ねる。

（近すぎて、顔、見られない……。）

こんなにドキドキしてるのは、きつと私だけだよ。

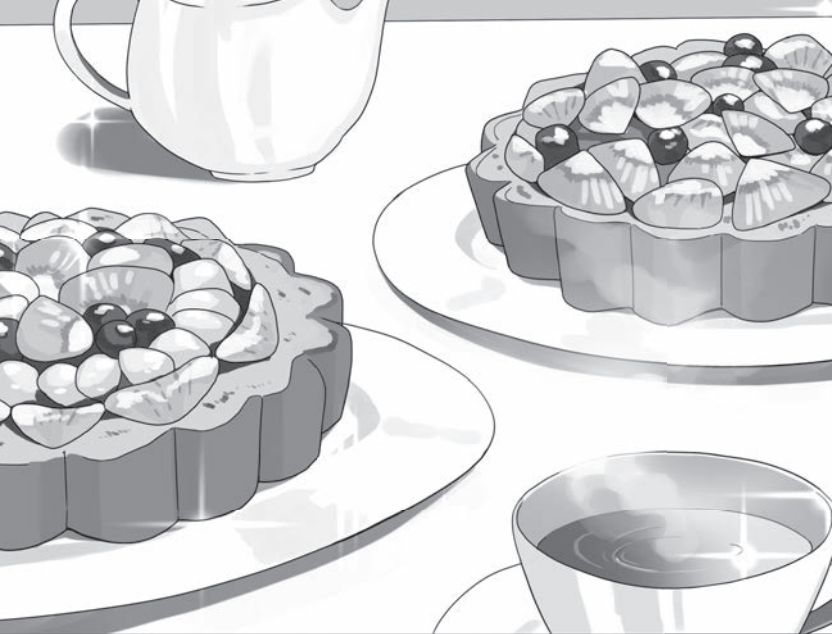
なんだか気恥ずかしくて、いそいでタルトを口に運んだ。

「わっ。タルトの生地、サクサクでおいしいね。」

「ああ。クリームもうまい。」

千代さんの、心のこもった手作りスイーツとミントティーの香りのおかげで、だんだん





と肩の力が抜けていく。

フルーツタルトを食べ終えるころには、自然な笑顔で笑い合っていた。

（壱弥といっしょにおいしいものを食べながら、ゆつくりできるって、幸せだなあ……。）

ティーカップに、壱弥がミントティーを注いでくれる。

まったりと穏やかな時間が流れるなか、壱弥がふっとほほ笑んだ。

「ドルフェスの合同ステージ、大成功だったな。パフォーマンスもよかった。」

わ……。壱弥にほめてもらえた！

思いがけない言葉が、とつてもうれしい。

「そう言ってもらえてうれしいよ。ナチュリとの合同ステージが実現したのは、壱弥のお

かげだよ。本当にありがとう。」

「昼休みに図書倉庫に呼び出されたときは、なにを言い出すかと思ったけど。」

壱弥がいたずらっぽく笑うから、思わず首をすくめた。

あのときは、諒くにムリを言って、壱弥を呼び出してもらったんだ。

壱弥なら私たちの想いと決意をわかってくれるんじゃないかって、一縷の望みをかけ



て。

でも、立場をわきまえない、とんでもない行動だった。

「そ、そうだよ。突然呼び出してしまったあげく、とんでもないこと言ってたよね。ごめんさい。」

「俺を呼び出して直談判するその度胸、嫌いじゃないけど。」

「あ、あはは……。もう無我夢中で……。」

「最初は、めんどくせーことに巻きこまなよって思ってたけど、kira-kiraの想いと決意に心を動かされた。で、新人だったころのことを思い出したんだ。」

「壱弥が新人だったころ……？」

うなずいた壱弥は、ミントティーをひと口飲んで息を吐いた。

「俺が新人だったころは、やりたいことがあっても、『前例がない。』って、ろくに考えもせずあっさりとか却下されてばかりだったな……。って。」

「……そうだったんだ。」

「悔しくて、『絶対にトップアイドルになって、意見を聞いてもらえるくらい力をつけて

やる。』って想いでここまでがんばってきた。今は、だいぶやりたいようにやらせてもらえるようになったから、俺ができることはしたいと思った。」

「だから、協力してくれたんだね……。」

「ああ。」

壱弥が協力してくれた理由を知って、たまらなく胸が熱くなった。

（壱弥も、たくさん苦悩して、努力して、いろんなことを乗り越えてきたんだね……。）

いつも完璧だからつい忘れそうになるけれど、壱弥も生身の人間だ。

苦しいことも悔しいことも、理不尽なことも、今まで山のようにあったのかもしれない。

『ギターも弾きたい。バンドもやりたい。でも、「成瀬壱弥」は王子キャラで売ってるから、そういう仕事がない。事務所にやりたいことをうったえても、「成瀬壱弥」を演じろって言われる。だから、別の名前で曲を発表したいって諒に相談したんだ。』

『俺も戦う。夜永として活動してみても、やっぱり作曲が好きだってわかったから。「成瀬壱弥」でも、好きなことができるよう力をつけて、俺をコントロールしてる事務所の大人た



ちと戦う。いつまでも操り人形でいたくない。』

いつかの壱弥の言葉を思い出して、涙がこみあげてきた。

誰もがうらやむような場所にいて、すべてを手にしてるように見える壱弥でも、まだ戦いつづけていて。

作曲に作詞にギター……。やりたいことを着実に叶えてる。

（壱弥は、本当にかっこいい。）

会うたびに、お顔だけじゃないかっこよさを知っていく。

信念があつて、どんな困難にも負けずに突き進む強さがあつて、他人の気持ちに寄り添ってくれる余裕とやさしさを持つてるんだ。

「壱弥は本当にすごいよ。すごくすごく、尊敬してる。」

心の中の熱い気持ちがあふれて、つい口からこぼれてしまった。

「……っ。そんなキラキラした目で見つめられたら……。」

「え？」

「いや、なんでもない。」

フィツと顔をそらした壱弥の耳が、赤い。

もしかして、照れてる？

（ヒエツ。か、かわいい……！ キュンがすぎるっ！）

貴重な壱弥の照れ顔を見た瞬間、私の心臓が止まりかけた。

（ダメだ。これ以上はムリ、心臓がもたない！）

ぐいつとミントティーを飲んで、キュン死しかけ状態からの回復を試みる。

こほんと咳払いした壱弥が、横目で私を見た。

「それ、俺のためのデートコーデ？」

「う、うん。壱弥はいつもオシャレだから、私なりにがんばってみたんだ。」

「へえ。かわいいな。すげー似合ってる。」

「……。ありがとう。」

うわ〜。壱弥にかわいいって言ってもらえたよ。

不器用なりに、オシャレをがんばってよかった。

すごくうれしくて、頬がゆるんじやう。



ふつとやさしく笑った壱弥が、すぐに意地悪な顔になった。

「ていうか、一日も早く特Aに来いよ。」

「えっ。わ、わかった！ ステラをもらえるようにがんばる。」

私も早く特Aに行きたい。そのためには、ステラをためなくちや。

「たしか、中間テストでクラス一位を取ったら三つ、文化祭で主役を演じたら三つ、ステラをもらえるんだろ？」

「うん。準主役だと二つみたい。」

「どっちも三つもらって。」

「ええっ。」

突然のムチャ振りに、驚きすぎて固まる。

（とんでもないことをサラッと言われたよ……。）

どっちも三つもらうなんて、ムリに決まってる。

「まさか、ムリだなんて思っ
てないよな？ やる前からあきらめてないよな？」

「うっ……。」

そうだった。壱弥はとっても厳しいお方なりました。

でも、私はもう二年生。しかも、転入したばかりでステラはゼロだ。

そのくらいのペースでステラをためないと、卒業までに間に合わないかもしれない。

（よし……。弱気な自分に負けない！）

決心した私は、壱弥を見つめた。

「どっちも三つももらえるよう、全力でがんばるよ。」

「じゃ、約束。」

につこりとほほ笑んだ壱弥が、私に小指を差し出した。

まるで王子様のようなしぐさに、ドキンと心臓が跳ねる。

「指切りしよう。」

「うん……。」

差し出した私の小指に、壱弥がきゅつと小指を絡める。

ひい。王子様と指切り……。

こんな贅沢なこと、していただいていいんですか？



「日向が特Aに来るの、待ってる。」

うわわわっ。ハスキーな甘い声で、そんなふうにささやかれたら……。

（尊死してしまうよっ！）

ていうか、壺弥の声、こんなに低かったつけ。

ぐつと大人っぽくなったような……。

（はわわ。耳が……耳が幸せすぎる……。）

それに、ミントの香りの吐息がかかるくらい、きれいなお顔がすぐそこにある。

あああ。まつ毛が長い……。とんでもなくお肌がきれい……。瞳もきれい……。

思わず見とれてしまっていたら、絡めた小指に、壺弥がチュツとキスをした。

（ひゃ——
!!!!）

それからは、キュンの過剰摂取で記憶があいまい。

たくさんお話しして、たくさん笑って、最高に幸せで楽しいデートだったってことは覚えてる。

えてる。

「ただいま。」

ブーツと熱ねつに浮うかされて、ふわふわした気分きぶんのまま家いえに帰かえってきた私わたしの手てには。
明日あした開催かいさいの壺い弥ちやのシークレットコンサートコンサートのチケットが四枚まい、しっかりと握にぎりしめられ
ていた。

